

女子美術大学アート・デザイン表現学科 3年次・選択

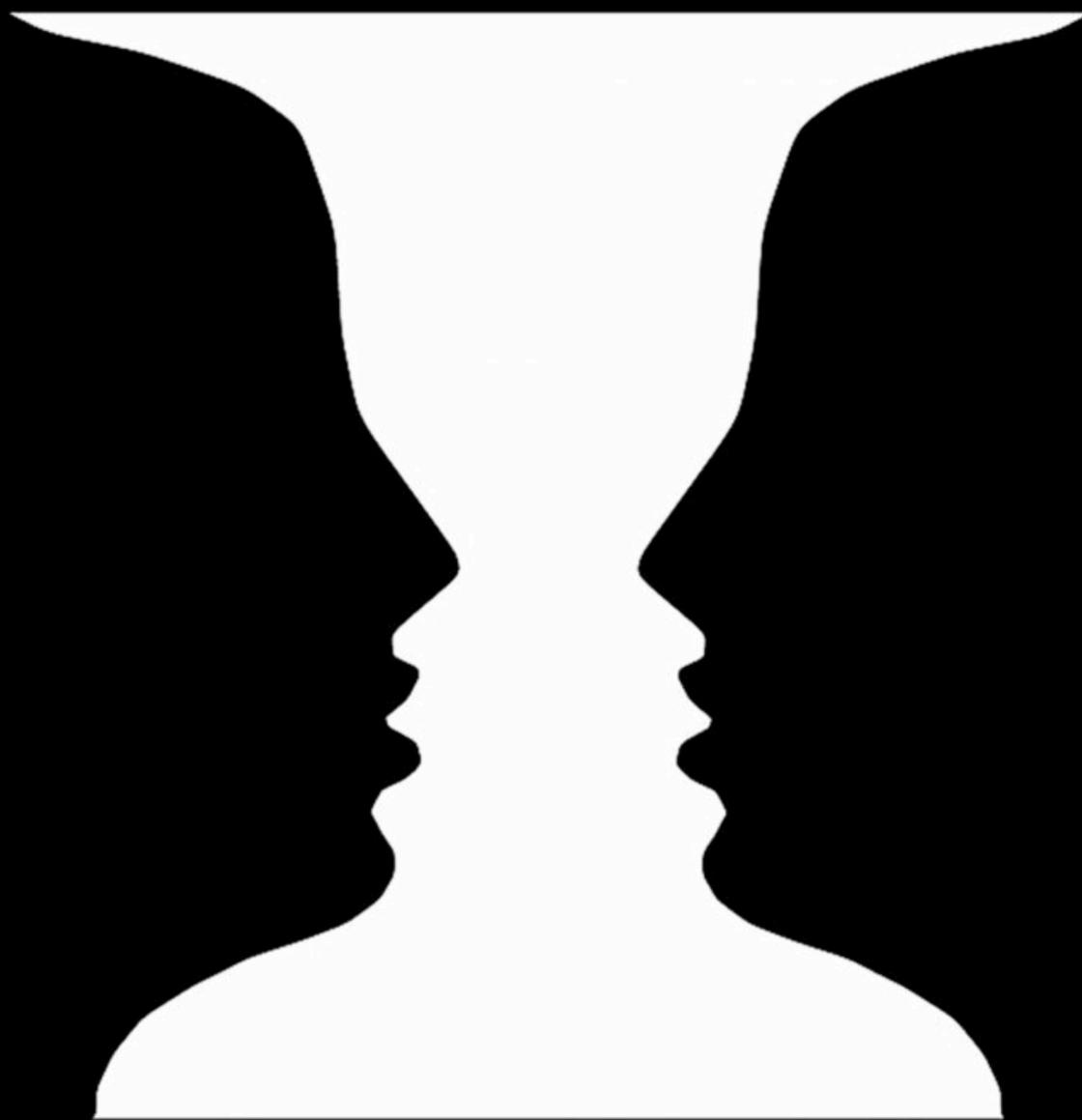
メディアクリエーション演習 (〈インタラクティブ〉 特別授業)

【講義】 西欧〈近代主義〉と〈藝術〉の誕生
～ 「インタラクティブ」であってはならない藝術、近代ドイツの新しい神

(2015-12-04)

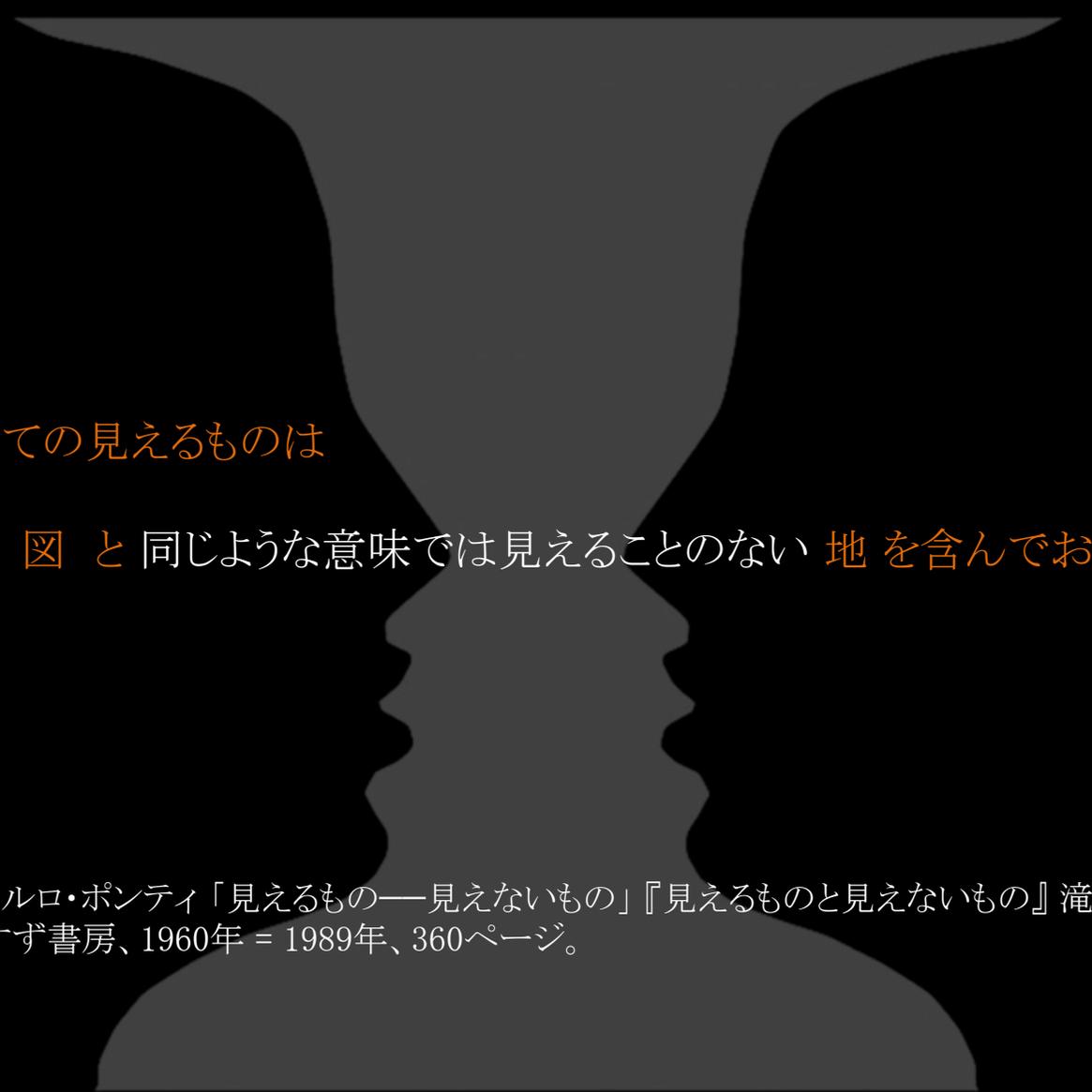
担当： 石井 拓洋
ishii05042@venus.joshiabi.jp

2015



「ルビンの壺」(多義図形)

<http://d.ibtimes.co.uk/en/full/1426245/rubins-vase.jpg?w=736>

The image shows the Rubin's Vase, a classic optical illusion. It is a black silhouette of a vase with a wide, flared top and a narrow neck. The central part of the vase is a light gray color. The illusion is that the central gray area can be perceived as either the interior of the vase (when viewed from the top) or the faces of two people looking at each other (when viewed from the bottom).

「すべての見えるものは

一、 図 と 同じような意味では見えることのない 地 を含んでおり、」

(出典)メルロ・ポンティ「見えるもの—見えないもの」『見えるものと見えないもの』滝浦静雄、木田元訳、東京:みすず書房、1960年 = 1989年、360ページ。

【イントロダクション】 （読みにくいので配布資料を参照のこと）

「ルビンの壺」に代表される「多義図形」にみる「図と地」に象徴的であるように、世の事物は、それ自体で単独で存在しているのではなく、常に、他との関係において存在している。言い換えれば、世の事物は、「実体論」的に存在しているのではなく、「関係論」的な存在と言えるだろう。

藝術に目を転じ、「インタラクティブ」アートと形容される藝術に着目するならば、また、もしそれが今日的な存在であるならば、それが生まれるに至った土壌、つまり、ことさら「インタラクティブ」ではないアートの土壌が、それに先立って存在していたはずである。それこそが、以降でわれわれが考察する対象、西欧の「近代藝術」に他ならない。

なぜ「近代藝術」が「インタラクティブではないと言えるか」とならば、それを最大に特徴づけることこそが、「自律性」だからである。「自律性」とは一般的に、他に依存せずにそれ自体で成立し存在するような性質であり、「近代藝術」でのそれとは、神学的な議論とは意図して離れて、主体的なる人間による最高の創造性において実現されるべき性質であった。

つまり、神にも匹敵する創造性を有する藝術家（「天才」）の手で「作品」が創造される時、その「作品」の存在は俗なる人間世界を超越する美的価値をもつはずとされ、それゆえに、かかる俗世界とは異なる理において存在すべきものと考えられた。すなわち「自律的」な存在としての「自律藝術」にこそ、藝術的意義が見出されたのである。

【イントロダクション】 （読みにくいので配布資料を参照のこと）

もとより、このような「藝術」とは、西欧の近代、すなわち 18世紀後半において、はじめて誕生した文化的「イデオロギー」(思潮, 時代の「空気」) によるものであった。

しかし、かかる「自律藝術」とは、いかなる西欧の思想的土壌の上に理念されたのか。また、その歴史的経緯、社会的背景とはいかなるものであったのか。さらに敷衍して、そこには何か批判すべきことがあるのか。そして藝術史的文脈において、なぜ 今日「インタラクティブ」なアートが現われるのか。

このような経緯を知ることは、今日の藝術に携わる者にとって、また、ことさらに非西欧圏において活動する専門家にとって、自らの立ち位置と進むべき方向をあらためて考える上で大きな助けとなるだろう。

上に述べた意図から、今回の講義では「インタラクティブであってはならない藝術」——西欧「近代藝術」——を取り上げることにしたい。

ただし、この壮大なテーマ対して、ここでの時間はあまりに少なく、内容が常に不十分であることを自覚しつつも、出来る限りその内実に迫ってみたい。

時代区分としての「近代」とは？

きんだい 【近代】

2. (modern age) 歴史の時代区分の一。広義には近世と同義で、
一般には 封建制社会 のあとをうけた 資本主義社会 についていう (広辞苑 p.733)。

中世
↓
近世

11C頃 「封建社会」
17C頃 「絶対王政」を経過

(主従関係)



↓
近代
↓
現代

18C末 「フランス革命」
「市民社会」の成立 (封建社会の打破)

(自由と平等)

• 啓蒙思想 Enlightenment

- 17Cから18Cの西欧における旧弊打破の革新的な思想
 - 合理的**理性**を尊重し、**進歩主義**を標榜をした
 - 理性的思惟によって**宗教的権威**や**王侯貴族に抵抗**した
 - 政治、教育を通して人間生活の**幸福の増進**を理念とした
 - **基本的人権** (自然権 = 人が生まれながらに有する権利) の萌芽
 - その成果は『**百科全書**』 (ディドロら編, 1751-80) に編纂
-
- 「キリスト教・王侯貴族」のためから、**「市民」のための生活へ**
 - 啓蒙思想が「近代」を導いた

啓蒙思想の特徴 : 西欧「近代主義」の特徴

- **西欧中心主義** eurocentrism
西洋こそが世界で最も進んだ文明であるという考え
- **要素還元主義** reductionism
物事の本質をさぐるには、本質以外の余計な要素を極力排除すべしとする考え
- **進歩主義** progressivism
新しいことは常に良いとする考え
- **人間中心主義** anthropocentrism
人間を 自然環境・生物 など 万物の中心とする考え
- **機械論** mechanism
人間は科学によって自然を制御することができるとする

「今日われわれが普通に使用している『芸術』という概念は
もともと西洋の近代社会において成立した概念である」

[村田誠一 : 242]

「今日われわれが普通に使用している『芸術』という概念は
もともと西洋の近代社会において成立した概念である」

[村田誠一 : 242]

※ 「われわれが普通に使用している『芸術』」？ (以下石井の思いつきを列挙)

- ・ 作者の個性や創造性を開示したもの？ そして、新しい表現こそ良し？
- ・ 実用的価値をはなれた、作品固有の美的価値をもつもの？
- ・ とにかく、作者がやりたいことをやった軌跡、感情や耽美のカタルシスの場として？
- ・ 美術館とか、オペラハウスとか、やはり格調や教養を感じさせる一面も？
- ・ 「胎教にモーツァルト」など、生物学的にも、先天的に人間にとって良い、とも？
- ・ 義務教育での芸術など、国民国家の一員として有益なるものを付与するもの？

近代において、いかに、

「藝術」概念が誕生するに至ったか？

啓蒙思想とどのように関わっているのか？

(主たる参考文献)

松宮秀治『芸術崇拜の思想：政教分離とヨーロッパの新しい神』東京：白水社、2008年。

「近代」以前の西欧（およそ10C～18C）は

「キリスト教」と
「絶対王政」の時代



「正殿」

<http://bienvenue.chateauversailles.fr/en/accueil>

フランス 「ブルボン朝」 **ベルサイユ宮殿**



「ラトナの泉水」と「大運河」

http://promptguides.com/paris/_photos/versailles/versailles_008.jpg

Marc Lagneau

フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



「オランジュリー庭園」と「スイス人の池」
<https://ciejai.files.wordpress.com/2013/11/dscn08201.jpg>

フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



「鏡の回廊」

http://en.wikipedia.org/wiki/Hall_of_Mirrors

フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿

フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



「王妃の正殿」 マリー・アントワネットの寝室

http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Versailles_Queen%27s_Chamber.jpg



プチ・トリアノン「社交の間」
撮影: T. ISHII

フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



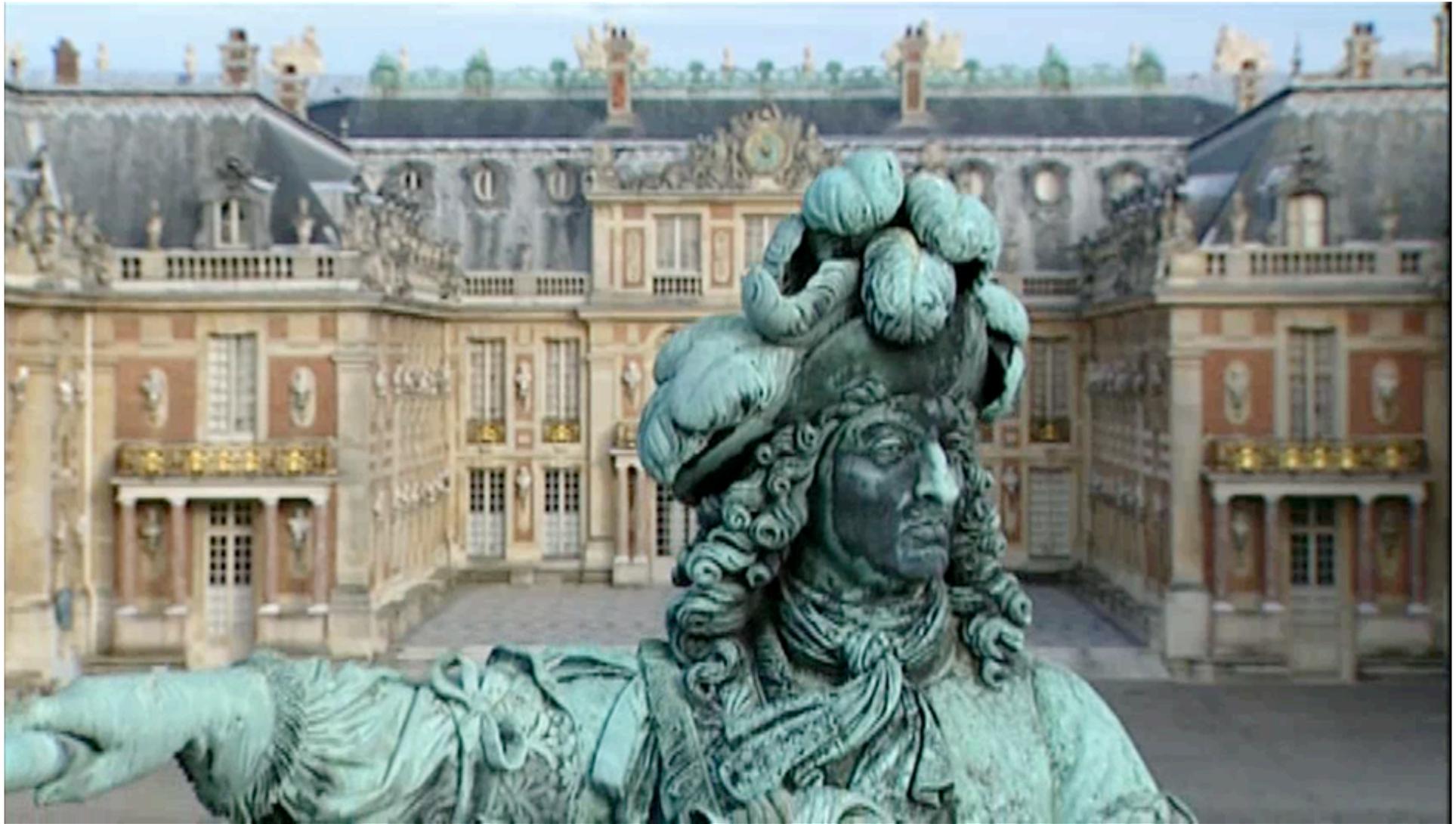
「王妃の村里」

撮影: T. ISHII

フランス 「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿

「マリー=アントワネットはヴェルサイユの宮廷から遠ざかることを考えて、1783年、村里を欲しました。田園生活の魅力と、親しい宮廷の女性たちに囲まれてのひと時を求めて、王妃は村里を訪れました。村里は、農夫が管理する 実際の農家として機能し、そこからの収穫物は宮殿の厨房に運ばれたのです」

<http://jp.chateauversailles.fr/jp/discover-the-estate/le-domaine-de-marie-antoinette/the-queen-hamlet/the-queens-hamlet>



Gerard Corbiaud "Versailles : la visite" AV600097, Montparnasse Productions, 1999, [DVD] より (7分程度, 宮殿内, 鏡の間など).
<http://www.editionsmontparnasse.fr/p717/Versailles-la-visite-DVD>

「藝術」概念の誕生前 = 「宮廷文化」 = 「近代藝術」が乗り越えるべきとした対象



Gerard Corbiaud "Versailles : la visite" AV600097, Montparnasse Productions, 1999, [DVD] より (1分程度, 王室オペラ劇場).
<http://www.editionsmontparnasse.fr/p717/Versailles-la-visite-DVD>

「藝術」概念の誕生前 = 「宮廷文化」 = 「近代藝術」が乗り越えるべきとした対象



Gerard Corbiaud "Versailles : la visite" AV600097, Montparnasse Productions, 1999, [DVD] より (10分程度, マリー・アントワネット資料).
<http://www.editionsmontparnasse.fr/p717/Versailles-la-visite-DVD>

「藝術」概念の誕生前 = 「宮廷文化」 = 「近代藝術」が乗り越えるべきとした対象

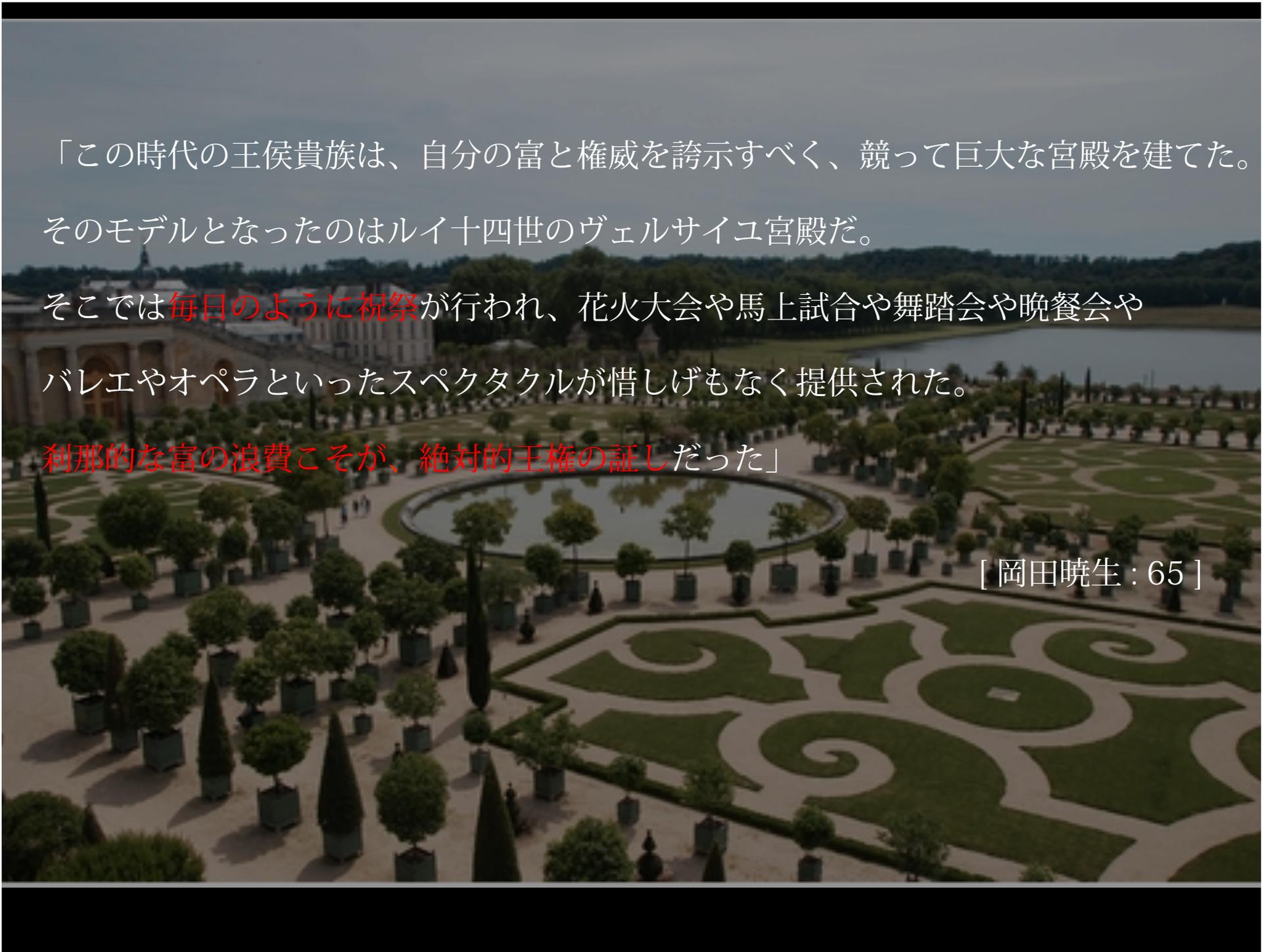


「この時代の王侯貴族は、自分の富と権威を誇示すべく、競って巨大な宮殿を建てた。
そのモデルとなったのはルイ十四世のヴェルサイユ宮殿だ。

そこでは毎日のように祝祭が行われ、花火大会や馬上試合や舞踏会や晩餐会や
バレエやオペラといったスペクタクルが惜しげもなく提供された。

刹那的な富の浪費こそが、絶対的王権の証しだった」

[岡田暁生 : 65]



「『王は願望を述べ、芸術家たちは構想を提出し、役人達は計算し、委員会では協議が行われた。手職人の一隊、大工、画家、仕立屋、庭師、料理人が動員された。

〔中略〕数千人の労働者が10万時間働いた、— それもおそらく一夜のうちに浪費されるためであった』（〔※リヒャルト・アレヴィン『大世界劇場』より〕）」

「花火、衣装、食事、建築、噴水、庭園、芝居、踊りなどと並んで—— こうした壮大な祝祭を演出するために欠かせない小道具の一つが、音楽だったのである」

[岡田暁生：65 - 66]

- 絶対王政の背景

- 「王権神授説」 [松宮 : 79]

- 神から王権を付託されたとする考え。これに基づいて
国王はローマ教皇の権威から独立し、人民を支配した。

- 新約聖書「ローマの信徒への手紙」第13章
(絶対王政の理論的根拠の一つといわれる)

- 「人は皆、上に立つ権威に従うべきです、今ある権威はすべて神によって
立てられたものだからです。従って、権威に逆らう者は、神の定めに背く
ことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう」 (ロマ書 13章)



「サンピエトロ大聖堂」(ヴァチカン)での「ミサ」より、「感謝の典礼」と「交わりの儀」の部分。
先代のローマ教皇 ヴェネデクト 16世による。(4分程度)

「イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。『取って食べなさい。これは私の体である。』また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。『皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流される私の血、契約の血である。』」

マタイによる福音書 26章-26,27,28

十二使徒の名前は
マタイによる福音書 10:1 より

ヨハネ
ゼベダイの子ヨハネ
使徒ヨハネ
(ゼベダイの子ヤコブの兄弟)

フィリポ

トマス

熱心党のシモン

徴税人のマタイ
福音記者マタイ

タダイ

ゼベダイの子ヤコブ

イスカリオテのユダ

ペトロと呼ばれるシモン

アンデレ
呼ばれるシモンの兄弟)

アルファイの子ヤコブ

バルトロマイ

L'Ultima Cena 最後の晩餐 (1495-1498)
サンタ・マリア・デル・グラツィエ教会 (Milan・Italia)

近代において、いかに、

「藝術」概念が誕生するに至ったか？

啓蒙思想とどのように関わっているのか？

(主たる参考文献)

松宮秀治『芸術崇拜の思想：政教分離とヨーロッパの新しい神』東京：白水社、2008年。

• 啓蒙思想 Enlightenment

- 理性的思惟によって宗教的権威や王侯貴族に抵抗した

- 「キリスト教・王侯貴族」のためから、「市民」のための生活へ
- 啓蒙思想が「近代」を導いた

啓蒙思想 からの 絶対王政批判 (政治的側面)

イマヌエル・カント (1724 - 1804) Immanuel Kant

「自己みずからの悟性 を使用する勇気をもて」

カント 『啓蒙とは何か』 (1784 = 1974)

悟性：「感性によって得た所与を認識へと構成する概念能力」(広辞苑)

※ 経験によって得た知恵。「実践理性」。ここから、あるべき姿 (道徳) としての「当為」へ。

啓蒙思想 からの 絶対王政批判 (政治的側面)

イマヌエル・カント (1724 - 1804) Immanuel Kant

「自己みずからの悟性 を使用する勇氣をもて」

カント『啓蒙とは何か』(1784 = 1974)

悟性：「感性によって得た所与を認識へと構成する概念能力」(広辞苑)

※ 経験によって得た知恵。「実践理性」。ここから、あるべき姿 (道徳) としての「当為」へ。

- 個人の「『真善美』以外のいかなる権威にも服従するな」の意
- 「カントの『啓蒙とは何か』は、、、
「王権」と「宗教」の**伝統主義的な権威を破壊**するための闘争目標」

啓蒙思想 からの 絶対王政批判（政治的側面）

イマヌエル・カント（1724 - 1804） Immanuel Kant

啓蒙主義は「伝統主義的な権威を破壊」を志向する

→ 伝統的権威による社会の「リセット」を志向する

「啓蒙思想は人間活動の全領域において、

すべての過去の伝統と権威を支えていた思想、制度にたいして、

『御破算で願ひましては』とゼロ地点に出発点を求めるよう

要求するのである」

[松宮：99 f.]

この「リセット」への志向こそ、同時代人らによる、

「無垢なる自然状態」、「善良な未開人」（ルソー）に対する共感につながる。

「 啓蒙のユートピア [※ が提示したもの] とは
宗教と政治の伝統主義と権威主義を全否定し、
世界市民としての人間が中心となった、
新たな市民共同体の青写真 [※ = 未来設計図] なのである 」

「 過去のすべての 伝統と権威をリセットして、
新しい社会秩序と価値体系を創造していこうとするのが、
啓蒙のプロジェクトなのである 」

国家運営からのキリスト教の排除

したがって、啓蒙思想がもたらした革命によって
誕生した **あらたな市民国家**においては、実際に、
その **体制からキリスト教など伝統的・権威的な宗教が排除**された。

→ (フランス革命後のジャコバン独裁時のキリスト教否定 など)

しかし、それでも国家には、やはり何らかの宗教が必要であった。

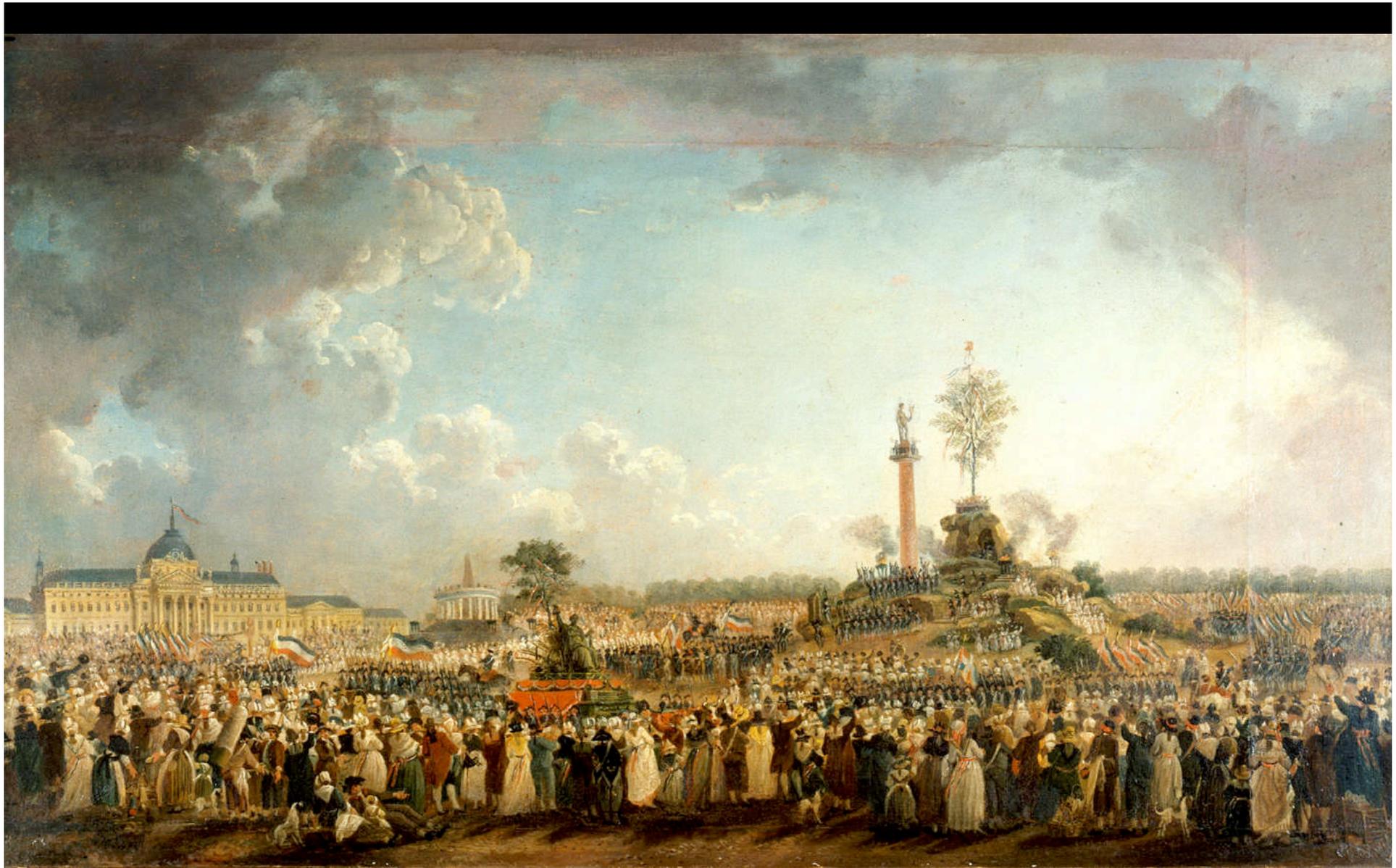
それは国の統治を円滑に進めるためである。そこで、

新しい「市民国家」には、新しい「市民宗教」が求められた。

それは、啓蒙主義的な理性に基づいた宗教だ。

例えば、フランス革命後のロベスピエールは「最高存在」という

理性崇拜の新宗教を人為的に創設した(→「最高存在の祭典」)。



「最高存在の祭典」（人為的につくられた理性的宗教） 祭典の演出は画家のジャック＝ルイ・ダヴィッド
Festival of the Cult of the Supreme Being, 1794

新たな国 (※ 近代国民国家) は、**新たな理性的な宗教**を求めた。

「それを作りあげるための拠り所として

白羽の矢が立てられたのが、

アルス※ (科学、技術、芸術)であった。

したがって、**近代ではこれらへの価値付けが高くなる**」

※ ラテン語 ars。「術」の意味。手段、方法、手だて。英語は art。

[松宮 54-55]

- 「十八世紀までは、ほとんどの sciences (学問) は arts (技芸) だった」
- 「十八世紀までは、ほとんどの sciences (学問) は arts (技芸) だった」
- 「大文字で始まる 抽象的な Art (芸術) [略] この概念が広まったのは
一九世紀 になってからのことである」

レイモンド・ウィリアムズ 「art 芸術・美術・技術」『完訳キーワード辞典』平凡社、1976 =2002、37～40頁。

近代の市民国家においては、新しい理性的な宗教が求められた。

その拠り所となったのは、アルス(科学、技術、藝術)であった。

イギリスやフランスでは、このうち、特に「科学と技術」が価値付けられた。

一方、ドイツでは、「藝術」が価値付けられた。

つまり、特に、近代ドイツでは、以後、「藝術」が、新たなる宗教的な位置に

まで、価値付けられていくことになる。

新たなる神として位置づけられた「藝術」は、超越的であり、
人間の世界から隔絶された、普遍なる存在であることが求められた。

ここにおいて、「藝術の自律性」が問われるようになる。

音楽でのベートーヴェンは、このような芸術を具現化する、
「天才」として、代表的な存在となる。

かくして、藝術は自律化の道を辿り、その規範は「音楽」に求められること
になる。

文化的分野で、啓蒙主義的な「リセット」を行なったのが、

ヴィンケルマン

J.J. Winckelmann (1717 - 1768) ドイツの美術史家



画像: wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

文化的分野で、啓蒙主義的な「リセット」を行なったのが、

ヴィンケルマン

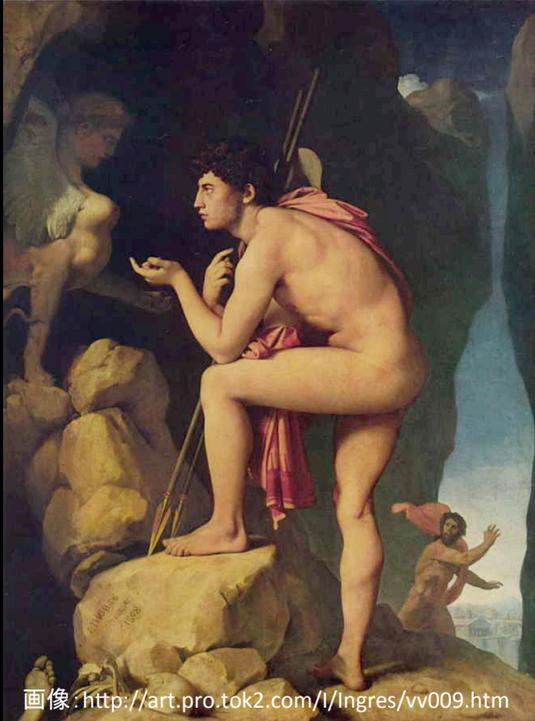
J.J. Winckelmann (1717 - 1768) ドイツの美術史家

『ギリシア美術模倣論』 (1755)

- 享乐的・感覚的な宮廷文化を表すロココ文化の批判
- ロココ文化を啓蒙主義的に「リセット」
- 「リセット」後の規範を、古代ギリシャ芸術（彫刻）にもとめた。
- 一旦、リセットした後、新たな進歩的な文化の創設を志向した（新古典主義へ）



画像: wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より



画像:<http://art.pro.tok2.com/l/Ingres/vv009.htm>

《オイディプスとスフィンクス》(1808)



画像:<http://art.pro.tok2.com/l/Ingres/Ingres4.htm>

《グランド・オダリスク》(1814)

新古典主義絵画 ジャン=オーギュスト・ドミニク・アングル (1780 - 1867, 仏)

ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）のような、
啓蒙主義的芸術論が批判の標的とした事柄

1. 〈創造性〉は神のみがもつという神話がダメ

2. 自然、それ自体を模倣することがダメ



画像：wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）のような、
啓蒙主義的芸術論が批判の標的とした事柄

1. 〈創造性〉は神のみがもつという神話がダメ

- ※ 人間だって創造することができる。場合によっては「天才」になれる。
- ※ 人間中心主義、機械論、進歩主義などの現れ

2. 自然、それ自体を模倣することがダメ

- ※ 自然を、ではなくて、ギリシア美術の作品を模倣すべし。
なぜなら、ギリシャ彫像の輪郭の美は、自然美と理想美の
両者を一つにする最高の観念だから。線描への価値付け。
(ヴィンケルマン 30)。

- ※ シャルル・バトウーにみる「自然模倣論」への批判
- ※ まさに「ギリシヤ美術模倣論」。
- ※ 人間中心主義、合理的精神のあらわれ？



画像: wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）のような、
啓蒙主義的芸術論が批判の標的とした事柄

「人間の精神は本来何も創造することができない。、、、

天才が、、、気紛れから自然の法則に反する組み合わせを作る

とすると彼は『自然』を貶め、かくて彼自らを貶めることになり、

一種の狂気に陥る。

〔自然の限界を〕超えるや人は、自らを見失い、、、一種の混乱を

生み出し、歡喜というよりはむしろ不快をひき起こすことになる」

シャルル・バトウー (1747 = 1984) 『芸術論』山縣熙訳、近代美学双書、p.26
(啓蒙主義的芸術論の批判対象としての「自然模倣論」の当時の代表格)。

ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）のような、
啓蒙主義的芸術論が批判の標的とした事柄

「人間の精神は本来何も創造することができない。、、、

天才が、、、気紛れから自然の法則に反する組み合わせを作る

とすると彼は『自然』を貶め、かくて彼自らを貶めることになり、

一種の狂気に陥る。

〔自然の限界を〕超えるや人は、自らを見失い、、、一種の混乱を

生み出し、歡喜というよりはむしろ不快をひき起こすことになる」

いや、人間の精神は創造することが出来る！（啓蒙主義的芸術論）

近代の市民国家においては、新しい理性的な宗教が求められた。

その拠り所となったのは、アルス(科学、技術、藝術)であった。

イギリスやフランスでは、このうち、特に「科学と技術」が価値付けられた。

一方、ドイツでは、「藝術」が価値付けられた。

つまり、特に、近代ドイツでは、以後、「藝術」が、新たなる宗教的な位置に

まで、価値付けられていくことになる。

新たなる神として位置づけられた「藝術」は、超越的であり、
人間の世界から隔絶された、普遍なる存在であることが求められた。

ここにおいて、「藝術の自律性」が問われるようになる。

音楽でのベートーヴェンは、このような藝術を具現化する、
「天才」として、代表的な存在となる。

かくして、藝術は自律化の道を辿り、その規範は「音楽」に求められること
になる。

「すべての芸術は音楽の状態を憧れる」

ウォルター・ペイター (文学者、批評家) 1877年

(ウォルター・ペイター「ジョルジョーネ派」『ルネサンス:美術と詩の研究』富士川義之訳、東京:白水社、1877年=1993年、141頁。)

※ 音楽は外界の模倣に表現が依存せず、たとえば器楽曲のように、人間の世界を超越するかのよう、作品自らの形式のうちに逐次に内容を表現しうる表現とみたため。

【ここまでのまとめ】

- ・ 18世紀後半、主に、フランスとドイツでの文化的・社会的動向の話
- ・ 仏、啓蒙思想が絶対王政を批判した（ディドロ、ルソーら『百科全書』、カント『啓蒙とは何か』）
- ・ 啓蒙思想に基づく文化的動向は「新古典主義」運動にあらわれる。仏にももたらされる。
- ・ 主唱者、ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）
- ・ 啓蒙思想は、伝統的権威を〈徹底的に〉粉砕せずにはいられない
- ・ 「新古典主義」は絶対王政的なるバロックやロココを批判した。
- ・ 啓蒙主義的「リセット」（松宮, 99）は、あるべき表現を、遡って古代ギリシャに規範をみた
- ・ 一方、近代市民国家はその体制維持のため、キリスト教に変わる、新たなる宗教をもとめた
- ・ アルス（科学、技術、藝術）に白羽の矢が立てられた
- ・ とくにドイツではこのうち「藝術」が価値付けられた
- ・ 従って、ドイツでは、以後「藝術」が、新たなる宗教的な位置にまで価値付けられていく

以降の内容の結論を先取りすると、、、

- ・ 神にも匹敵する、人間の秘めたる内面的な精神の「表出」を企図
- ・ 職能 (役に立つこと) から切り離し、俗なる人間的要素を排除する文化
- ・ 純粹なる作品 (作品を構成する要素から不純な要素を徹底排除)
- ・ 靈感と想像力による作品
- ・ 人間のあるべき姿を示す「教養材」と見なされるべきもの

「ドイツでは1750年代頃からこのような考えが顕著なものとなり、
他の国々に先駆けて「芸術」という概念を成立させ、
それを大きな観念体系に育てることができた」

[松宮、174-175]

- ・ 神にも匹敵する、人間の秘めたる内面的な精神の「表出」を企図
- ・ 職能 (役に立つこと) から切り離し、俗なる人間的要素を排除する文化
- ・ 純粹なる作品 (作品を構成する要素から不純な要素を徹底排除)
- ・ 靈感と想像力による作品
- ・ 人間のあるべき姿を示す「教養材」と見なされるべきもの

藝術

「ドイツでは1750年代頃からこのような考えが顕著なものとなり、他の国々に先駆けて「芸術」という概念を成立させ、それを大きな観念体系に育てることができた」

[松宮、174-175]

→ いわゆる「藝術」とは (われわれの普遍的な営みではなくて)、近代ドイツという時代と地域が、その特性や必要性によって生み出した、特殊時代的・地域的な「思想風潮」(イデオロギー)の性格が強いとする視点も

いわゆる「藝術」とは(われわれの普遍的な営みではなくて)、
近代ドイツという時代と地域が、その特性や必要性によって生み出した、
特殊時代的・地域的な「思想風潮」(イデオロギー)の性格が強いとする視点も

いわゆる「藝術」とは(われわれの普遍的な営みではなくて)、近代ドイツという時代と地域が、その特性や必要性によって生み出した、特殊時代的・地域的な「思想風潮」(イデオロギー)の性格が強いとする視点も

【いわゆる「藝術」 = 近代ドイツのイデオロギー】

- ・ 神にも匹敵する、人間の秘めたる内面的な精神の「表出」を企図
- ・ 職能(役に立つこと)から切り離し、俗なる人間的要素を排除する文化
- ・ 純粹なる作品(作品を構成する要素から不純な要素を徹底排除)
- ・ 靈感と想像力による作品
- ・ 人間のあるべき姿を示す「教養材」と見なされるべきもの

いわゆる「芸術」とは(われわれの普遍的な営みではなくて)、近代ドイツという時代と地域が、その特性や必要性によって生み出した、特殊時代的・地域的な「思想風潮」(イデオロギー)の性格が強いとする視点も

【いわゆる「芸術」=近代ドイツのイデオロギー】

- ・ 神にも匹敵する、人間の秘めたる内面的な精神の「表出」を企図
- ・ 職能(役に立つこと)から切り離し、俗なる人間的要素を排除する文化
- ・ 純粹なる作品(作品を構成する要素から不純な要素を徹底排除)
- ・ 靈感と想像力による作品
- ・ 人間のあるべき姿を示す「教養材」と見なされるべきもの

藝術

- ゲルマン民族の〈精神のよりどころ〉として作られた「新しい神話」という視点
- ドイツの民族性が多く反映した近代の文化的遺産という視点(特にベートーヴェン)
- =つまり、これが「近代藝術」という視点(=〈インタラクティブではないアート〉)

Q. なぜ芸術の神格化が行なわれたのが〈ドイツ〉であったのか？

Q. なぜ芸術の神格化が行なわれたのが〈ドイツ〉であったのか？

1. 「ドイツ観念論」 (= ドイツ理想主義) の思想的土壌

2. 文化的後進国としての気概 (18世紀～19世紀初頭)

Q. なぜ芸術の神格化が行なわれたのが〈ドイツ〉であったのか？

1. 「ドイツ観念論」 (= ドイツ理想主義) の思想的土壌

Q. なぜ芸術の神格化が行なわれたのが〈ドイツ〉であったのか？

1. 「ドイツ観念論」 (= ドイツ理想主義) の思想的土壌

● ドイツ-かんねんろん 【ドイツ観念論】

「十八世紀後半から十九世紀前半にかけての
カント・フィヒテ・シェリング・ヘーゲルに至るドイツ古典哲学」

「**理性の自律性**とその自己反省、**普遍的なイデー (理念)**による体系の
論理的統一、**人格の倫理的な性格**など、**観念的理想主義を根本的共通性とする**」

● かん-ねん-てき 【観念的】

「2) 現実を無視して抽象的・空想的に考えるさま」

Q. なぜ芸術の神格化が行なわれたのが〈ドイツ〉であったのか？

1. 「ドイツ観念論」 (= ドイツ理想主義) の思想的土壌

イマヌエル・カント (1724-1804) I. Kant の観念論

- ・ 人間が認識しうる外界とは、人間が共通してもつ生来的能力の範囲の限りである
- ・ つまり、人間の認識は、外界の限定的な姿（現象の世界 = 「経験界」）のみ可能
- ・ しかし、人間は、外界の本当の姿（「本質」※1）を認識できない
- ・ つまり、「本質」にかかることは、そもそも人間には認識不能 「私とは?」「世界、神とは?」
- ・ それはあきらめるべき
- ・ だから、人間は「本質」に対してただ〈あるべきこと※2〉を意志して実践するのみだ
- ・ つまり、道徳をどう考えるかにこそ哲学の根本がある

※1: 「可想界」

※2: 「当為」 sollen

[竹田: 118-120]

Q. なぜ芸術の神格化が行なわれたのが〈ドイツ〉であったのか？

1. 「ドイツ観念論」 (= ドイツ理想主義) の思想的土壌

啓蒙的な〈あるべきこと〉 = (当為、理想的・倫理的・道徳的であること)

これらを尊ぶ思想的土壌、つまり「真善美」を求める「ドイツ観念論」が、
ドイツの「芸術」の前提として存在した。

※ 啓蒙思想は中途半端をゆるさない。何事も行き過ぎるほどに徹底する。

したがって、もとめるべき〈あるべきこと〉も徹底的に追求する。

つまり、その希求の辿り着くのは、つまるところ、

人間自身が超越者たる神的な存在となることである。

そのような人間 (= 「天才」) が作り出すものがこそが「芸術」作品である。

そのような神性をおびた芸術作品は、民族の精神の拠り所となっていくた。

Q. なぜ芸術の神格化が行なわれたのが〈ドイツ〉であったのか？

2. 文化的後進国としての気概 (18世紀～19世紀初頭)

Q. なぜ芸術の神格化が行なわれたのが〈ドイツ〉であったのか？

2. 文化的後進国としての気概 (18世紀～19世紀初頭)

- 古代ローマの文化に直結するイタリアやフランスへのコンプレックス
 - そこで、ゲルマン民族とは本来無関係なはずの古代ギリシャとの人為的関連づけも為される (ヴィンケルマン 『ギリシア美術模倣論』)
[松宮:70]
- さらに、ナポレオン (仏) に対する 軍事的敗北の屈辱
 - 「イエナ・アウエルシュテットの戦い」(1806) でフランス軍がプロイセン (首都ベルリン) を制圧
 - フィヒテの連続講演会 「ドイツ国民に告ぐ」(1804～1808)
消沈したドイツ国民精神作興を意図
[石井宏:298]

Q. なぜ芸術の神格化が行なわれたのが〈ドイツ〉であったのか？

2. 文化的後進国としての気概 (18世紀～19世紀初頭)

「独立を失った国民は、同時に、時代の動きにはたらきかけ、その内容を自由に決定する能力をも失ってしまっています。もしも、ドイツ国民がこのような状態から抜け出ようとしなければ、この時代と、この時代の国民みずからが、この国の運命を支配する外国の権力によって牛耳られることになるでしょう」
フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』(1807)

※ 啓蒙思想は中途半端をゆるさない。何事も行き過ぎるほどに徹底する。
したがって、もとめるべき〈あるべきこと〉も徹底的に追求する。
つまり、その希求の辿り着くのは、つまるところ、
人間自身が超越者たる神的な存在となることである。
そのような人間 (= 「天才」) が作りだすものが「芸術」作品である。
そのような神性をおびた芸術作品は、民族の精神の拠り所となっていく。

Q. 神格化された芸術はどのような在り方を目指すのか？

Q. 神格化された芸術はどのような在り方を目指すのか？

1. 人間的日常を超越した「絶対的」(⇔ 相対)な存在を目指す

2. ドイツの「新しい神話」としての「天才」ベートーヴェンのモデル

Q. 神格化された芸術はどのような在り方を目指すのか？

1. 人間的日常を超越した「絶対的」(⇔ 相対)な存在を目指す

Q. 神格化された芸術はどのような在り方を指すのか？

1. 人間的日常を超越した「絶対的」(⇔ 相対)な存在を目指す

●ぜったい【絶対】

「1). 他に並ぶものがないこと。他との比較・対立を絶していること」

『広辞苑』

・ 人間の力によって、人間的なる次元を超越することを目指す

- 初期ロマン主義文学運動が源 (フィヒテ、シェリングなど)
- 「芸術の『無用の用』の論理の展開」 (シュレーゲル)
- 「崇高」 the sublime なるもの (エドモンド・バーク)
- インタラクティブ性の対極

・ 無限への憧れ

- 時間の無限 (過去への思い, ゲルマン的古代や中世、北欧神話)
- 空間の無限 (インドなど、非西欧地域) F・シュレーゲル
- 「普遍」への価値観

Q. 神格化された芸術はどのような在り方を指すのか？

1. 人間的日常を超越した「絶対的」(⇔ 相対)な存在を目指す

ドイツロマン主義文学運動の時代区分

「初期ロマン派」(1797~1804頃) (高辻, 205)

- 大学町イエーナに集まった人達

- ・ フィヒテ (カントの後継者) 哲学・文芸批評
- ・ フリードリヒ・シェリング - 哲学・文芸批評 (『芸術哲学』1802)
- ・ シュレーゲル兄弟 - 哲学・文芸批評
- ・ ルードヴィッヒ・ティーク - 文学
- ・ ノヴァーリス - 文学

ロマン主義にみえる
絶対的なるものの価値を
基礎付けた人達

「盛期ロマン主義」(1804~1809) (ハイデルベルグ・ロマン派) (高辻, 234)

- ドイツでもっとも古い大学町ハイデルベルグを中心として
- 哲学的思索よりも文学創作に熱心

- ・ ブレンターノ (作家)
- ・ アルニム (作家)
- ・ ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ (1788-1857) (作家)

ドラマ性

「後期ロマン派」(1810~1840頃) (シュヴァーベン・ロマン派) (高辻, 238)

- 中世の民謡研究・収集に興味。ローカル色の濃い民謡調の試作へ。

- ・ ルードヴィヒ・ウーラント
- ・ グスタフ・シュヴァープ (1792-1850)
- ・ ヴィルヘルム・ミュラー (1794-1827) シューベルトの『冬の旅』の詩。

民族性、ローカル性
ドラマ性

Q. 神格化された芸術はどのような在り方を指すのか？

2. ドイツの「新しい神話」としての「天才」ベートーヴェンのモデル

Q. 神格化された芸術はどのような在り方を指すのか？

2. ドイツの「新しい神話」としての「天才」ベートーヴェンのモデル

- ・ 「絶対性」・「無限性」・「普遍性」を体現する「器楽音楽」の賞揚

- 初期ロマン主義文学の人達が音楽の超越性に着目（ティークの「崇高」など）
- 「音楽の最高の価値」として「敬虔」の感情を指摘（ヘルダー）

- ・ 「天才」ベートーヴェンの器楽音楽、とくに交響楽の賞揚

- E・T・A・ホフマン（1776-1822, マルチ人間）

「ベートーヴェンの音楽は戦慄、恐怖、驚愕、苦痛の梃子（てこ）を動かし、ロマン主義の本質たる無限の憧憬を喚び覚ます。

ベートーヴェンは純粹にロマン的な（従って真に音楽的な）作曲家であり、それだから彼の場合、声楽曲がなかなか成功しないということになるのである」

Violinen, Klarinetten

ff

Violen

Celli, Bässe



器楽曲は他の芸術の援助も混入も一切拒否して、音楽芸術にしかない
独自のものを純粹に表現している

[ホフマン (1810=1984) , 349-350]

「器楽曲は他の芸術の援助も混入も一切拒否して、
音楽芸術にしかない独自のものを純粋に表現しているのである。
この音楽こそあらゆる芸術のうちで最もロマン的なもの——
唯一純粋にロマン的な芸術と言ってよいだろう」

[ホフマン (1810=1984) , 349-350]

(きわめて近代的な芸術観が反映した言葉)

「すべての芸術は音楽の状態を憧れる」

ウォルター・ペイター (文学者、批評家) 1877年

※ 音楽は外界の模倣に表現が依存せず、たとえば器楽曲のように、人間の世界を超越するかのよう、作品自らの形式のうちに逐次に内容を表現しうる表現とみたため。

「絶対音楽」

「一種の音楽的純粹性の理想的なあり方を示す概念として一般的には歌詞とか標題とか機能といった音楽外的なものから解放された自立的な音楽を指すとともに、さらには『絶対者』、『絶対的なるもの』を予感させる高い価値をもった音楽として理解されていると考えてよいだろう。

この概念をはじめて用いたのがヴァーグナーである」

[三浦, 72]

※ ヴァーグナーは ベートーヴェンの 第9交響曲について「絶対音楽」と名辞した

【まとめ】 1/3 近代主義の批判的検討からコンセプト立案への可能性

インタラクティブ表現の対極たる、非インタラクティブな表現を確認するため、その根源といえる、啓蒙主義に基礎付けられた「近代藝術」を確認した。そして、その理想的な発露としての、ドイツ・ロマン主義の「絶対音楽」にまで辿り着いた。

それは、この世の全ての〈他との対立、関係を絶つ〉ことを旨とする物であり、したがって、そこには理念上、決して「インタラクティブ性」は存在しえない。

そしてここで着目すべきは、このような理念にもとづいてなされた、文化的営みこそが今日われわれが、当たり前前と考えている「藝術」の概念の受容に、なお、少なからず影響を与えているのである。

【まとめ】 2/3 近代主義の批判的検討からコンセプト立案へ可能性

しかしながら、ここでの「藝術」とは、まさにドイツ語圏の民族が、当時の彼らのおかれたコンテクストから、その必要性において、藝術を神格化し、近代以降の、新たな精神的な拠り所を企図した結果といえる。

つまり、近代ドイツという、特定の時代と地域が、その特性や必要性によって生み出した、特殊時代的・地域的な「思想風潮」(イデオロギー)の性格が強いとする視点の可能性も留意すべきだろう。

さらに端的にのべるならば、

「藝術」とは、近代ドイツ語圏の人々の、ローカルで一時的な文化的営みであり、決して、全世界的で時代を超えて普遍的なるものではないとも考えられるのだ。

【まとめ】 3/3

近代主義の批判的検討からコンセプト立案への可能性

仮にこのような視点を設定するならば、我々が日常的に認識しがちな「藝術」概念、例えば、「他の表現ジャンルに頼ることなく、より純粹に本質的な表現」や、あるいは、「倫理的・道徳的な内容を含意する表現」とするような価値について、これをわれわれは、いかにして、あらためて正当化することができるだろうか。

もし正当化するとならば、ここまで確認してきた背景とは、全く異なる文脈においてなされることが考えられ、興味深い議論が期待できるだろう。

一方で、もし普段は自明視する「藝術」に対して、そこへの批判的な視点に基づき、その特殊性や、あるいは、そこに隠されていた権力性などが、新たに視界に入るならば、そこからは同時に、新たな制作コンセプトの論点もまた、看取しうる可能性もあると考えるのである。

主な参考文献・さらなる知識のために

石井宏 (2004) 『反音楽史：さらばベートーヴェン』 新潮社。

岡田暁生 (2005) 『西洋音楽史：「クラシック」の黄昏』 中公新書。

神林恒道 (1996) 『シェリングとその時代：ロマン主義美学の研究』 行路社。

高辻知義ら (1997) 『ヨーロッパ・ロマン主義を読み直す』 岩波書店。

松宮秀治 (2008) 『芸術崇拜の思想』 白水社。

三浦信一郎 (1999) 「ベートーヴェン神話の形成と支配：音楽における近代」、神林恒道ら編『芸術における近代』 ミネルヴァ書房。

吉田寛 (2002) 「E・T・A・ホフマンの音楽美学にみる歴史哲学的思考：器楽の美学はいかにして進歩的歴史観と結びついたのか」 『美学芸術学研究』 20、東京大学大学院人文社会科学研究科。

E・T・A・ホフマン (1810=1984) 「ベートーヴェン・第五交響曲」 鈴木潔訳 『無限への憧憬：ドイツ・ロマン派の思想と芸術』 国書刊行会。

E・バーク (1757 = 1999) 『崇高と美の観念の起源』 中野好之訳、みすず書房。

小田部胤久 (2009) 『西洋美学史』 東京大学出版会。

熊野純彦 (2006) 『西洋哲学史：近代から現代へ』 岩波新書。

岡田暁生 (2005) 『西洋音楽史：「クラシック」の黄昏』 中公新書。

松宮秀治 (2008) 『芸術崇拜の思想』 白水社。

村田誠一 (1999) 「近代の終焉? : 芸術的表現の可能性と限界」、神林恒道ら編『芸術における近代』 ミネルヴァ書房。

ヴィンケルマン (1755 = 1976) 『ギリシア美術模倣論』 澤柳大五郎訳、座右宝刊行会。

バトラー (1747 = 1984) 『芸術論』 山縣熙訳、近代美学双書。

メルロ・ポンティ (1960=1989) 「見えるもの——見えないもの」 『みえるものと見えないもの』 滝浦・木田訳、みすず書房

Web 『ベルサイユ宮殿』 オフィシャル・ページ (日本語版)

<http://jp.chateauversailles.fr/homepage>

以上